風化させないために僕ができること

鹿児島県立甲南高等学校
一年　福留　豪希

僕は二〇〇八年八月十二日に生まれた。その年より三十年前の八月十二日、日置市吹上浜で一組の男女が北朝鮮に拉致される事件が起きた。いわゆる日本人拉致事件の一つだ。

僕が拉致問題について知るきっかけとなったのは、平壌放送という北朝鮮のラジオ放送を偶然聞いたことだ。聞き慣れない言葉に興味が沸き、北朝鮮について調べていくなかで拉致問題を知った。さらに被害者家族が身近に存在することも知った。日々穏やかに過ごしていた家族を突然奪われる悲しみや苦しみはどれほどのものか。そして、家族を奪われたまま四十六年の月日が流れ、被害者家族以外の人々は事件があったことを忘れ、若い世代は知ることさえもなくなり、拉致事件は風化してゆく。

「風化」に対して、自分でも何か出来るこ

とはないか。僕は、二〇二三年夏、拉致被害者家族である市川健一さん龍子さんご夫妻に直接話をうかがうことにした。訪れた市川さん宅には願いの込められた「カエル」の人形やぬいぐるみなどがたくさん置かれていた。

一九七八年八月十二日、健一さんの弟修一さんは交際していた増元るみ子さんと一緒に吹上浜に夕日を見に行った後、行方が分からなくなった。十五年を経た一九九三年、北朝鮮に拉致されたという事実が明らかになる。それまでの十五年間、家では修一さんの話題は避けられていた。思い出すと悲しく辛い思いを両親がするからだ。「どこにいてもいい。元気でいてくれたら」修一さんの無事を願う母親トミさんの言葉だ。しかし、トミさんも父親の平さんも修一さんとの再会を果たせないまま亡くなった。今、健一さんご夫妻は、自分たちが存命のうちに修一さんとの再会を果たしたいと強く願っている。進展が見られない現状への焦りや歯がゆさ、なによりも拉

致問題が風化してしまうことへの不安を抱えながら、日々の生活を営みながら、講演活動や署名活動を様々な場で続けている。

この真実を多くの人に知ってもらうことが風化させないために大切だと考えた僕は、中学校の課題研究で拉致問題についてポスター発表をした。しかし、周囲の反応はとても薄かった。このままではいけない。僕は、市川さんご夫妻に直接お話してもらうのが一番だと思い、中学校で講演をしていただいた。みんな真剣に話を聞き、涙を流す人さえいた。それほど心に響く被害者家族の言葉だった。

僕にとって八月十二日は誕生日だからおめでたい日だ。だが、拉致事件を知ってからは被害者に思いをはせる日にもなっている。そうすることが風化させない唯一の方法なのだ。

「修ちゃんカエル、必ず帰る」被害者家族の願いが叶うよう、拉致問題を若い人たちにも知ってもらい風化させないために、僕にできる行動を続けていきたい。